

錦城山プロジェクト ～総合的な教育活動を目指して～

石川県立加賀聖城高等学校教頭 朝本 学

1 はじめに

本校は、石川県の南西に位置する人口7万人の加賀市（かがし）大聖寺にあり、福井県と接している。旧加賀国のうち、旧江沼郡だった町村が合併し誕生した市である。機械製造業が発達し、山代温泉、山中温泉、片山津温泉といった温泉地にも恵まれており、観光業も盛んである。

昭和41年4月に石川県立大聖寺高校から普通科高校定時制課程が分離独立し、現在の夜間の加賀聖城高校が開校され、昭和48年には昼間二部制普通科が設置された。

昭和50年代繊維産業の悪化に伴い県外集団就職者が激減し、数年後高度経済成長に伴って全日制へ進学者が増加することによって、定時制の希望者は減少した。平成に入り昼間部の生徒は増加したが、2000年代になると経済産業の空洞化、少子化問題等で全国的な学校の統廃合の流れの中で、平成20年度本校昼間部が募集停止となり、現在は夜間部のみの小規模校である。

「聖城」とは大聖寺城という意味を持ち、本校は文字通り、大聖寺城跡にある。



2 本校の概要

(1) 生徒数、教員数

現在は、1年11名、2年11名、3年23名、4年10名、計55名の生徒が在籍し、生徒の大部分は地元加賀市内の中学校出身者で占められていて、9割が10代である。経済的な理由や不登校で入学する生徒が多く、発達障害の可能性を抱えた生徒も少なからず在籍している。

日中アルバイトをしている生徒の割合は7割程度で家庭経済を支えている生徒が多くいるのが現状である。彼らはこのような経験を乗り越え、学習環境を変えて高校で学びたいという希望をもって入学してきている。

一方教員数は校長1、教頭1、教諭7、養護教諭1、臨任講師2、非常勤3で構成され、各教科ほぼ1名体制である。

《学年別在籍数・年齢別》

年齢	15	16	17	18	19	20代	30～59	60～	合計
1年次	10	1							11
2年次		8	2	1					11
3年次			12	4	3	3		1	23
4年次				7	2		1		10
合計	10	9	14	12	5	3	1	1	55

(2) 柔軟なカリキュラム

社会人として自立するために必要な基礎的・基本的な学力の定着を図ることに基づいてカリキュラムを編成している。2学期制の単位制をとり、授業は1限から4限(45分)からなり、2限後S、Hと補食の時間が15分ある。1年次と2年次は基礎基本とした科目を中心のカリキュラムで3年次と4年次は選択A～Gの科目群の中から進路や興味関心に応じた科目を選択をし、3、4年次生混合の授業を展開している。また、1年次の国語、数学、英語においては、学力差を補うためにT、Tの授業も展開している。その他、通信制の併修や高卒程度認定試験などにより単位の補完し3年間での卒業も可能である。

《教育課程》

年次	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
1	国語総合	現代社会			数学 I	理科基礎	体育		保健	芸術	英語 I	ビジネス基礎	総合的な学習の時間	L	H					
2	国語総合	地理 A	数学 I	理科総合 A	体育		保健	英語 I	家庭基礎	情報 A	L	H								
3	世界史 A	体育	選択 A	選択 B	選択 C	選択 D	選択 E	選択 F	選択 G	L	H									
4	国語表現 I	体育								L	H									

《科目群》 ○は学校設定科目

選択A	○郷土の文学	情報処理	○実用数学
選択B	○郷土史	被服製作	物理 I
選択C	○旅と地理	OC I	簿記
選択D	文書デザイン	○楽しい英語読物	数学A
選択E	理科総合 B	生活英語	発達と保育
選択F	フードデザイン	課題研究	○ニュースポーツ
選択G	○現代語	○生活総合	○地球環境

《教科群》

選択A	国語	商業	数学
選択B	地理歴史	家庭	理科
選択C	地理歴史	外国語	商業
選択D	商業	外国語	数学
選択E	理科	外国語	家庭
選択F	家庭	商業	保健体育
選択G	国語	家庭	理科

(3) 進路状況

[平成23年3月卒業生] 昼間部 7名、2名進学(短大、専門学校)、4名就職、1名未定、

夜間部 11名、3名進学(大学1 専門学校2)、6名就職、2名未定

[平成24年3月卒業生] 夜間部 11名、3名進学(大学2、専門学校1)、8名就職

多様な生徒が在籍する本校では、進路実現に対する意識の差も大きく、明確な進路目標を持っていない生徒も少なくなく、キャリア教育の充実が急務の課題といえる。

(4) 部活動状況

◇石川県高等学校定時制通信制総合体育大会

女子バドミントン個人3位 男子ソフトテニスペア2位、女子ソフトテニスペア1位

男子100m全国大会出場、女子800m、3000m全国大会出場

◇全国高等学校定時制通信制総合体育大会

女子ソフトテニス個人ベスト8、団体ベスト8(石川)

男子ソフトテニス個人・団体3回戦敗退(石川)

女子3000m6位

◇北信越高等学校定時制通信制総合体育大会

女子ソフトテニスペア1位 男子ソフトテニスペアベスト8

女子バドミントン個人ベスト8 男女団体優勝(石川)

3 錦城山プロジェクトについて

(1) 発足の契機

平成23年4月、石川県において石川の恵み豊かな里山里海の保全の推進を図り、将来世代に引き継ぐための事業として策定された「いしかわ版里山づくりISO」に参加することにした。

本校は、校舎から間近に仰ぎ見る錦城山にスポットを当てて、その豊かな自然を守るための里山づくり活動に参加すべく活動計画を作成し、7月に県に申請を行い、8月にいしかわ版里山づくりISO認証団体となりました。この時点では、まだ、明確な目的が定まらず、前年度の環境教育やボランティア教育の一環としての位置づけであった。内容としては、錦城山遊歩道の清掃・整備やサギコロニーの定点観察を考えていた。

(2) プロジェクトの形成までの経過

しかし、この事業の認定により20万円の予算が確定したことによりもっと総合的な取り組みが必要である考え、このプロジェクトが学校の活性化、教員の授業改善への意識改革、地域へのアピールに繋がればとの思いで立上げた。

そこで、24年度の総合的な学習の時間を中心にこの取り組みを学校全体のプロジェクトとして発展させるに至った。

ところが、本校の取り組みを地元新聞で見られた地域在住の植物研究家（古場田良次氏）がクレームに訪れ、これでは、錦城山の植物の環境に影響があるということであったので錦城山の植生について相談し、植生の講師になってもらうことになった。これにより錦城山を巡りながら希少植物の保護観察について調査する取組「植生」を考えることになった。

また、サギコロニーについては、錦城山の鷺が3月～7月に東南アジアから飛来するというところで近くにある鴨池観察館のレンジャーにアドバイスを受け、「サギ」についての観察・学習を推し進めるに至った。

さらに、錦城山が南北朝時代から山城があり様々な戦いの場となり、歴史上、大聖寺藩が錦城山を250年にわたってお止め山、すなわち入山禁止したことから「歴史」についても研究することになった。

11月中頃、錦城山プロジェクトの概要が見え始めて、生徒数60、教員数8から4グループに分けて取り組もうと考え、12月に錦城山の麓に発展してきた大聖寺町の芸術、文化、町を考察する「文化」グループを取り入れることにした。

1月全校集会で生徒、教職員に錦城山プロジェクトの概要を話し、意識付けを行う。11月～3月にかけて錦城山の学習を目的に地元の植物研究家、鴨池自然観察館レンジャー、歴史研究家、加賀市文化課の方をお招きして講演会を実施した。そして、4月からのスタート体制を整えた。

(3) 目的

- ①生徒の自尊感情、自己有用感を育成し、学校の活性化を図る。(対 生徒)
- ②聖城高校への誇りと使命を持って全教員が学校経営に参画する意識の高揚を図る。(対 教員)
- ③聖城高校の情報を発信するために地域への参加、協力により交流を図る。(対 地域)

これらの目的達成のためこの錦城山を中心として大聖寺をも含めた総合的な教育の素材を学習、調査、創造、研究する錦城山プロジェクトを計画した。

(4) 構成

授業においては、各教科指導、総合的な学習の時間、特別活動学校行事等において錦城山をテーマとした教材を作成し実践することで郷土を理解し、郷土に誇りを持ち、郷土愛を育成する。

さらに地域内外の様々な人々の参加、協力による取組を行い、地域の人々との関わりを深めることで生徒の社会性を培う。

全校生徒を4つのグループに分ける。(希望登録)

校長をプロジェクトディレクター、教頭をプロジェクトマネージャーとして、教員も4つのグループに分かれ、グループリーダー、サブリーダーとなり、外部アドバイザーを付ける。

グループ名 ①錦城山の植生 ②錦城山の鷺 ③錦城山の歴史 ④錦城山の文化

③錦城山の歴史

- ・ 錦城山の模型を作成する・ 錦城山の周囲をめぐる
- ・ 市立図書館で錦城山と大聖寺町に関する本を調査
- ・ 錦城山について地域の人へアンケート調査 ・ 錦城山の不思議（ミステリー）を作成する
- ・ 錦城山の経済的な価値を見積もる(大学と協力) ・ 錦城山の景観写真を作成する
- ・ 大聖寺藩の城下町を調べて現在との比較をする ・ 錦城山に関するWeb一覧を作成する
- ・ 「錦城山の植物（堀野末男著）」から抜粋してWebで紹介する（著作権あり）
- ・ 錦城山にまつわる民話・伝説を調べ、紙芝居を作成

④錦城山の文化

- ・ 山口玄蕃（大聖寺町が最も整備された頃）について調べる。
- ・ 伊林先生の講話を整理し、パワーポイントを作成する。
- ・ 大聖寺藩の時に、なぜ錦城山がお止め山（入山禁止）となったかを調べる。
- ・ 発掘調査を見学する、またボランティアとして参加する。
- ・ 大聖寺（お寺）がどこにあったのか推理する。
- ・ 錦城山にまつわる民話・伝説を調べ、紙芝居を作成する。
- ・ 大聖寺城での戦いを推理し、パワーポイントを作成する。
- ・ 大聖寺の歴史の不思議（ミステリー）を作成する。
- ・ 大聖寺の古地図を調査する。 ・ にせがね事件（パトロン事件）の真相を究明する。
- ・ 采女事件を検証する。 ・ 錦城山の模型を作成する。

4 具体的な取り組み

＜総合的な学習の時間における計画と実行＞

(1)総合的な学習の時間

授業時間における取り組みとしては、総合的な学習の時間を利用して、木曜1限の毎週1時間を隔週間隔で2時間連続で行い、木曜2限は次の週は1、2限連続になる。この連続した2時間で色々な内容のものを実施していく。

(2)部活動

- ◆ 希少植物の保護柵づくり
- ◆ モミの木輪切りの墨付け
- ◆ サギヤマの観察（日中）

(3)地域連携・学校行事

- ◆ 錦城山の歴史・植生・文化に関する講話(地域の研究者)
- ◆ 地元住民からの歴史に関する聞き取り ◆大茶盛・ 地域の寺(蓮光寺)におけるお茶会
- ◆ モミの木輪切り指導（地元の建築関係者等）

(4)教科指導等での具体的な取り組み

国語「郷土の文学」（学校設定科目）においては地元の有名人について取り上げ、地歴「郷土史」（学校設定科目）においては戦国時代の地元の歴史に触れる。また、理科「地球環境」（学校設定科目）では、錦城山の植生をもとに生物多様性などについて取り上げ、「英語Ⅰ」では、歴史グループの発表原稿を英文に翻訳する。「体育」の授業では、錦城山登山の実施、家庭「被服製作」では、錦城山の枝や木の実を利用した草木染め、「情報A」においては錦城山紹介のWebページ作成、商業「文書デザイン」では、錦城山プロジェクトポスター制作…等

錦城山に関連した授業展開を全教員に取り組んでもらっている。

月	内 容
4月	ガイダンス ノートづくり
5月	錦城山フィールドワーク①
6月	錦城山フィールドワーク② 各グループ別調査① 錦城山講話①（錦城山の歴史）
7月	各コース別調査② モミの木輪切り体験
9月	グループ内発表会
10月	作品展示 各グループ別調査③
11月	中間発表 各グループ別調査④
12月	錦城山講話②
1月	発表会準備 発表会

(5) 成果の発表（中間発表）「自己表現力を身につける言語活動」

9月末に4つのグループ内において中間発表が行われた。

【植生グループ】

錦城山に自生しているキンランやモミの木など、各生徒が調べた植物について、グループ内で発表し、意見交換をしました。日頃、全校生徒の前では、なかなか発表出来ない生徒でも少人数になるとしっかり発表できていたようです。

【サギグループ】

冬枯れの森にサギが巣作りを始めた様子。雛が成長して巣立ち間近の様子。

サギの数をカウントするみんなの様子など、サギとそれを観察する様子を報告した。

【歴史グループ】

大聖寺城にまつわる人物を中心に説明しながら、当時の戦の様子や時代の流れについても調べて発表しました。また、「大聖寺」という「寺」の所在についての考察もした。

【文化グループ】

錦城山・大聖寺に関する本を調べる、大茶盛の体験など行ってきました。

グループ毎に本について調査したことを中心に、PowerPointを利用して発表しました。後期に向けて、深めた内容に取り組んでいく予定です。

これらの発表で他の生徒の発表をお互いに見ることで自己表現力を身につける言語活動が経験できたと思われる。

5 成果と今後の課題

(1) 成果

- ・すべての学校運営や学校行事を「錦城山プロジェクト」に集中することにより、明確な目的のもとで物事がわかりやすく展開できた。
- ・石川県の魅力ある学校づくり推進事業などへの企画がスムーズに行えた。
- ・地域の援助・協力によってたくさんの情報を得ることで、地域との良好な関係を築くことができた。
- ・本校のWeb ページを頻繁に更新することにより、アクセス数が増え、情報発信することができた。
- ・この事業により本校をマスコミ、県里山里海展、県文教会館、加賀市立中央図書館などでアピールすることができた。

(2) 今後の課題

- ・夜間部のみであるので昼の活動がほとんどできないことから、部活動や地域活動に制限が生じてしまう。
- ・総合的な学習の時間だけでは十分な活動ができない。
- ・教員のモチベーションに落差がある。やらされ感があるのではないか。
- ・活動が1週間または2週間に1度だから、生徒のモチベーションが保てない。
- ・予算がない。

(3) 課題の克服に向けて

- ・プロジェクトを開始して1年間では、なかなか何をすればいいのかが見えてこないなので、数年間の地道な継続が結果を出す。
- ・教員のやる気にかかっている。教員へのインセンティブも必要である。
- ・成功事例を積み上げ、外部からの評価を受ける。

最後にこのようにこれまで約1年間の取組でしたが、これからはさらに地域の方々にアンケートをとったり、歴史などについてさらに聞き取り調査をして、研究内容を深めて行きたいと考えています。このような取り組みによって生徒が授業ではなかなか経験のできない主体的な活動を行うことで生きる力を身につけていく事を期待しています。